世代を紡ぐ道しるべ ⑧

～元海上保安官のひとりごと

中島敏

命のよりどころ・心のよりどころ

灯台記念日は、我が国初の洋式灯台である観音埼灯台の起工日である明治元（1868）年11月1日にちなみ、この日を灯台記念日としたことはご承知のとおりです。

平成30（2018）年11月1日、パレスホテル東京において、皇太子同妃両殿下のご臨席を仰ぎ、灯台150周年記念式典が開催されました。私が退職後のことです。皇太子殿下からは、幼少の頃、ご両親と野島埼灯台を訪れた思い出とともに「海が一層安全で美しく、豊かであることを願う」とのお言葉を賜りました。海保職員は、海上の安全と治安の確保に向け、決意を新たにしたのではないかと思います。

日本における洋式灯台の歴史は、幕末の慶応2（1866）年に米、英、仏、蘭の4カ国との間で締結した改税約書（江戸条約）により、灯台を設置することが求められたことに端を発しています。灯台は近代国家への歩みの先駆け、先人たちの強い使命感がこの国の礎を作ったと言っても過言ではありません。船舶交通の安全を確保する灯台の役割は、視覚に頼る世界に暮らす人類にとり必要不可欠、これからもその重要性は変わりません。

第4次交通ビジョンで、「灯台観光振興支援」を重点施策として掲げ、地方公共団体等による灯台の観光資源としての活用等も積極的に促すことで、海上安全思想の普及を図り、地域活性化にも一定の貢献を果たすとしています。地元に寄り添う灯台の新たな役割にも期待しています。

一方で、役割を終える灯台もあります。平成28（2016）年9月30日、函館港中央埠頭南船だまり防波堤灯台が消灯、84年の歴史に幕を下しました。その内容が北海道新聞等に紹介され、記事をご覧になったご婦人から函館保安部に一通のお手紙が届きました。その一部を紹介します。

『はじめまして　最北の街よりH28・10・1（土）北海道新聞（灯台84年の明かり消す）の見出しに誘われ涙ぐみ拝読させて戴き、感無量でございました。私は稚内の最北端ノシャップで生まれ、生家は漁業でしたから19屯（トン）の船主兼船頭が父で、魚を満載して帰途に就く際の深夜、漆黒の海にて一番嬉しいのは燈台の明かりが点滅する、それが嬉しく誘導されて基地に戻れる倖せ、燈台よ有難うの言葉を何回も聞いて育ちました。（中略）道新の記事を拝見し涙を押さえられなく亡き父を、宗谷の海を想い出し感傷に浸ってペンを執りました。（中略）本当に長い間　お疲れ様　ご苦労様でございました。燈台の灯よありがとう（後略）』

海を生業とする者にとり、灯台の灯は「命のよりどころ」、一方で留守を預かる家族にとっては「心のよりどころ」です。航海の安全を祈った「守灯精神」、形は変われどその欅（けやき）、次世代につないでいただきたい。

（第44代海上保安庁長官）

＝つづく